

三人

原民喜

青空文庫

遠くの低い山脈は無表情な空の下に連つてゐた。しかしその山脈を銀のナイフで切れれば血が噴き出すかも知れない——何だかさう云ふ氣持も少しした。鈍い太陽が冬枯れの練兵場の上にあつた。眺めはまるで人生のやうに退屈であつた。今日は正月二日なので兵士の影もない。そのかはり山裾の道に添つて、三人の青年がとぼとぼと歩いてゐた。彼等はさつきから沈黙だまりくらべでもしてゐるらしく、てんでに素氣ない顔をしてゐた。だが、その重苦しい氣分に反抗するために、一人の男の濃い眉は時々無意識に動いた。また、一人の男の瘠せて怒つた肩は窃に或る表情を見せてゐた。また、一人の青白い男の唇の隅はピクピクと巫山戯てゐた。しか

し三人は三人とも口をきかなかつた。

この不思議な沈黙は何に責任があるのかしら、と青白い男は唇の隅へ煙草を銜へてぼんやりと考へてゐた。彼は大学を二度無意味に落第して、惰性でもう一度落第するかも知れなかつた。濃い眉をした男の頬は少し赤かつた。彼は肺を病んでぶらぶら散歩して暮すのだつた。肩の怒つて瘠せた男は画をやるのだが、絵具も持つてゐなかつた。彼等は今日も^{あて}的もなく街で出逢ふと、二口三口言葉を交へて、的もなく散歩に來たのだつた。彼等は二十五歳になつた。そしてその響は空虚であつた。或る悲惨な落伍者のやうな気分が三人の頭を抑へた。

しかし、それが凡てであらうか。仮りにもし一人が何か素晴し

いことを云へば、他の二人も即座に歓声をあげて寛ぐかも知れないのだ、誰もそれを知つてゐながら奇妙に素晴らしいと云ふことがなかつた。だから黙つた。

山裾を廻つて坂になるところまで来た時、眉の濃い男が、「帰らうか。」と云つた。他の二人が黙々と同意した。そして三人は街に引返した。そして別れた。

青白い男は家に帰ると、急ににやにや笑ひ出した。妹がその容子を見てけげんがると、一そう得意になつて笑ひ出した。

青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日

入力：蔣龍

校正：小林繁雄

2009年8月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三人
原民喜

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>